2013/10/20　白鷺教会　神学校の日・聖日礼拝

聖書箇所：ヨブ記　42:1-6：讃美歌21・474＆461

　　　　　　　　　　　　　「**ヨブは慰められた」**

1. お読みいただきました聖書の箇所は、ヨブ記の最後の章の最初のところであり、ヨブの神様への最終応答のところです。ヨブ記は不可思議な書物であり、その中でも本日の箇所は不可思議のクライマックスのようなところです。ヨブ記の内容を簡単に振り返ります。まず、神様はヨブに苦難を与えることをサタンに許可します。最初の内は、ヨブは「わたしたちは、神から幸福を頂いたのだから、不幸もいただこうではないか」として信仰深い立場を堅持していました。しかし、サタンの試みはエスカレートして行き、遂にヨブは我慢ならず、自分の生まれた日を呪い、神様に不条理を抗議する姿勢に転じます。ヨブを慰めようとやって来た友人は、ヨブを諭します。「神様から苦しみを受けるのは罪を犯したからに違いない。心から神様に立ち帰るなら、幸いが回復するだろう」と言います。神様に立ち帰る、ということは悔い改める、ということです。常識的には、大変信仰深い友人達です。これに対し、ヨブは「断じてあなたたちを正しいとはしない。死に至るまでわたしは潔白を主張する」と答え、神様に対しては、抗議し続け、自分に直接答えることを要求する姿勢を貫きます。とうとう、神様はヨブに現れ、全能の力を持って神様はこの世界を統治していることを示します。また、怪物のようなものについても神様の支配下にあることをヨブに示します。モーセと同様の神顕現にあったヨブは、神様の支配を受け入れ、神信仰に立ち帰ります。その転換の告白の場所が42章1-6節です。そして神様は、ヨブの友達たちに対し、「お前たちは、私について私の僕ヨブのように正しく語らなかった」と言い、怒りを示します。ヨブが燔祭による執成しを行い、神様の罰から逃れることができました。他方、ヨブについては、当初以上の幸いを回復いたします。ハッピーエンドの安映画のような終わり方ですが、とにかく、すべて「よかった、よかった」、と言ったところです。しかし、根本的な疑問が残ります。あれだけ強い抗議をしていたヨブはなぜ大転換したのでしょうか。42章6節でヨブは「悔い改めた」とされていますが、何を「悔い改めた」のでしょうか。友人の言うように、罪を認め、悔い改めたのでしょうか。では、正しいはずのことを言っていた友人がなぜ叱られ、ヨブが正しい、とされたのでしょうか。伝統的には、「ヨブは神様に高慢な自己義認の言葉を吐き、それを深く悔い改め、神様は悔い改めによる立ち返りを良し、とせられ、幸いを回復された」と、理解されてきました。それなら、なぜ、ヨブは正しい、とされたのでしょうか。矛盾しています。また、42章6節は「悔い改めた」と訳すのが唯一の訳なのでしょうか。
2. この言葉はヘブル語では「ni:ham」という言葉です。ヨブ記ではこの言葉が7回使われていますが、ここだけは他の箇所と異なる変化形です。他の箇所は、「慰められる」と訳することで問題はありませんが、この箇所の使用法は複雑です。ニファル形といいます。伝統的には「悔い改める」とか「悔いる」と訳されてきました。英語では「repent」です。新共同訳、新改訳初版は「悔い改める」であり、口語訳、新改訳3版は「悔いる」です。辞書をみると、極めて多様な意味が挙げられています。「申し訳ない」「悲嘆にくれる」「同情する」「悔（くや）む」「悲しむ」「嘆く」という訳から、「救われた」「楽にする」「慰める」「慰められる」「和解する」という訳までが挙げられています。他の箇所と同様の「慰められる」の意味もあります。研究書によりますと、このニファル形ni:hamの基本的な意味は、negativeな心の状態からpositiveな心の状態に変わる、というところにある、ということです。その結果、この言葉の訳として、「考え直します」とか「改め、転換します」という訳も出てきました。詩編110編4節では「思い返される」または「御心を変える」と訳されています。結局、「嘆く」「悔いる」「悲しむ」というnegativeな心の状態から「救われた」「慰められる」「楽にする」というようなpositiveな心の状態に転換することを意味しており、状況によって、そのnegativeまたはpositiveな心の状態そのものも意味する、と解釈できます。従って、ここではヨブが「悲嘆にくれる」状態から、「慰められる」状態への転換を意味している、と理解することができます。転換の結果である「慰められる」という訳も可能であり、アメリカの神学者ではそのように訳する人も居ます。では、なにが、ヨブをしてそのような転換を可能にさせたのでしょうか。ヨブ記における神様の回答の言葉を読んでいきますと、この世に発生するすべてのことは神様の見守りの下にあり、自分もその一部であることが感じられます。安心感に包まれるようになります。そうです、神様の恵みがこの世を覆っており、苦難の状況にある時こそ神様は愛をもって見ておられ、時が至れば介入される、という約束がある、と言うことです。ヨブはこの恵みにより神様の回答の中に、「慰めの約束」を見ることが出来たのです。
3. ここに至りますと、マタイによる福音書における山上の説教の一節を思い出します。「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」とあります。ここでの「悲しむ者」はヘブル語ではa:be:lと言いますが、「慰められる」はni:hamです。この二つの単語が同時に使用されている箇所を旧約聖書で探しますと、ヨブ記第29章第25節、イザヤ書第61章第2節、エレミヤ書第31章第13節が出てきます。ヨブ記のところは、ヨブが嘗て神様に守られていた時、「私は嘆く人を慰め、彼らのために道を示してや」った、といわれているところです。「嘆く人を慰めた」という形で出てきます。イザヤ書の箇所は山上の説教の原型が示されている、ところとして有名なところです。「主が恵みをお与えになる年、私たちの神が報復される日を告知して、嘆いている人々を慰め」る、と言われています。主が嘆いている人々を慰めてくださる、というのです。最後のエレミヤ書のこの箇所も新しい契約が与えられることを予言した有名な箇所です。「その時、おとめは喜び祝って踊り、若者も老人も共に踊る。私は彼らの嘆きを喜びに変え、彼らを慰め、悲しみに代えて喜びを祝わせる」とおっしゃられています。「嘆きを喜びに変え、慰め、悲しみを喜びに変える」と言うのです。ヨブ記のni:hamに示された、「嘆く者」、「悲しむ者」が「慰められる」という約束は、預言書から発し、旧約の中でこだまし、主イエスの山上の説教において結実している、と見ることができるでしょう。ヨブのような「苦難」「嘆き」「悲しみ」の中に在る人には必ず「慰め」が与えられるという約束を主がされている、ということです。それ故、「悲しむ」人は「幸いだ」なのです。「悲しむ」人こそ「慰め」を得ることができるのです。
4. 世界中至る所で、自分では何も悪いことをしている訳ではないにも関わらず、大変な苦難の状況に直面している多くの人々がいます。シリアからの難民はなんと2百万人を超えています。また、我々の身近にも、東日本大震災のような信じがたい惨状を齎したことも起きました。私たちは、このような場面に直面すると、その被害者に対し、言うべき言葉を失います。本当に、共にさめざめと泣く事しか私たちにできない、とも思わされます。しかし、あのすべてを失ったヨブに、神様は「あなたは、慰められる」とおっしゃいました。主イエスは「悲しむ者こそ慰められる」と約束されました。私たちは、主の約束により生かされている者です。言葉を失った状況のなかで、この福音をあえて述べ伝える者となりたい、ものです。祈ります。
5. （ご在天の父なる御神様、白鷺教会の皆さんとともに主を礼拝する時をお与えくださいましてありがとうございます。またこの教会が神学校のために、祈り、奉げ物をしてくださっていることを感謝いたします。本日は神学校日のメッセージとして、ヨブ記のなかから学びました。大きな苦難の中にあったヨブに対し、「慰められる」と約束された神様の恵みを知ることができました。それがイエス様の「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」という御言葉に繋がっていることも知りました。私たちに、慰めの約束を信じる信仰をお与えください。苦難に中に在る兄弟姉妹に主の慰めが与えられますように、お願い申し上げます。我らの主、イエス・キリストの名によって祈ります）。

以上